

特217

780

ルルーダス著
村順三譯

マルクスの階級意識論

——ルカッチの「階級意識論」批判——

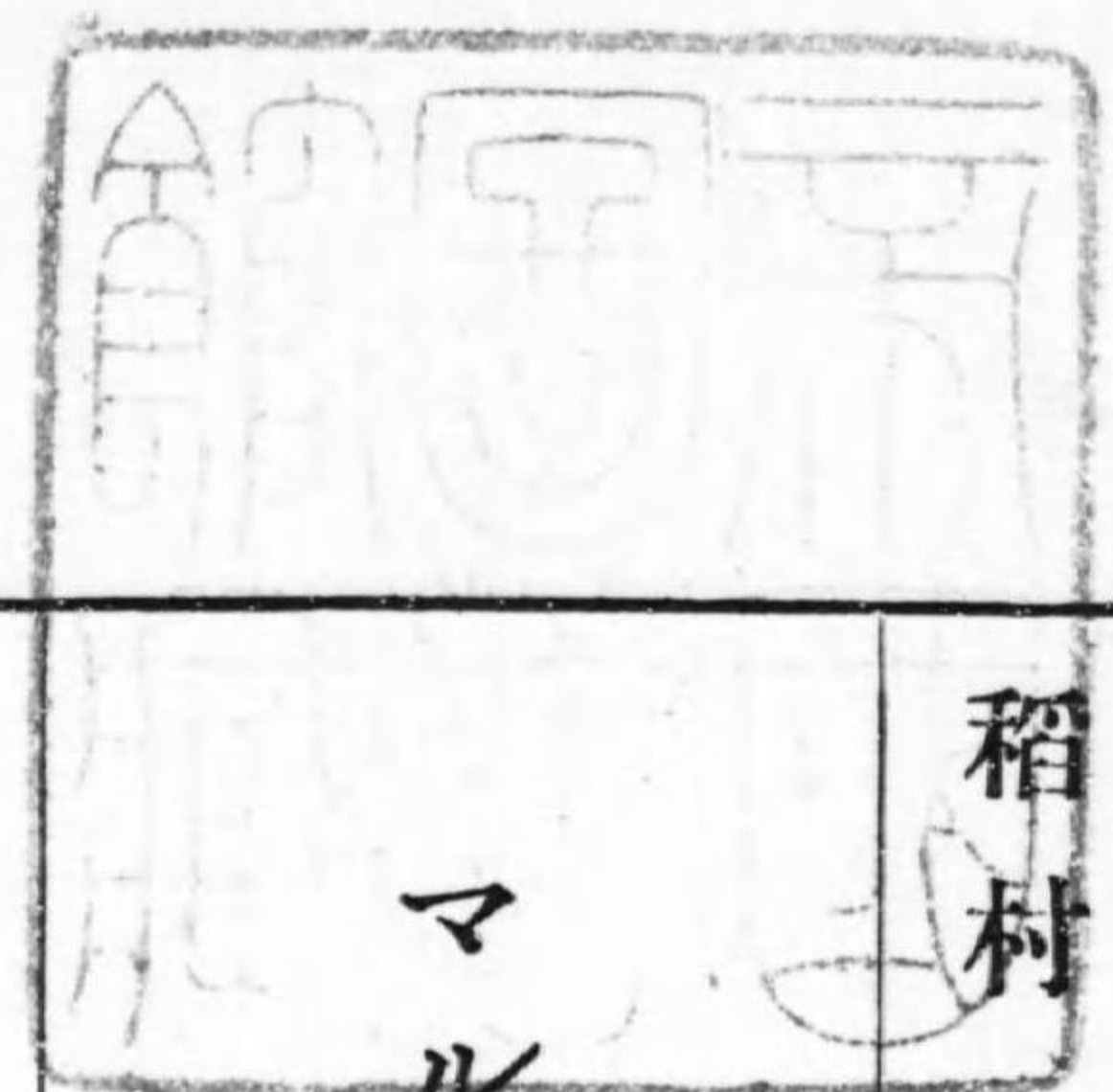
叢文閣版



始



特217
780



エル・ルーダス著
稲村順三譯

マルクスの階級意識論

叢文閣版



譯者序

本書は *Arbeit-Literatur* 第十號に載せられたラディスラウス・ルーダスの論文 „Die Klassenbewusstseinstheorie von Lukács” の全譯である。

「階級意識とは何ぞや」といふことは、分り切つてゐるやうであつて、仲々に理解されなかつた問題である。稍よもすれば階級意識と云へば、今日の社會狀態を客觀的に正確に認識したプロレタリアートの意識であるかの如く解せられて來た。しかしてプロレタリアートの階級意識は、これ等理論的に把握した個々人の獨占物のごとく考へられる傾向があつた。かくては、プロレタリアートの階級意識は、プロレタリア階級全體のものが、現實に於いて有してゐる意識ではなくて、少數のマルクス主義的理論を把握したもののみが、即ち一定の個人のみが有するのであつて、それ以外の大多數にとつては、當爲たるに止まる。かくして一年か二年マルクス・レーニンの著書を漁り讀んだものがプロレタリアートの階級意識を持つに至り、多年プロレタリアとしての生活をなして來たものが階級意識を持たなかつたりする。即ち階級意識が理論によつて製造されたりする。

だが、われわれは階級意識はプロレタリアートが階級として現實に於いて持つてゐる意識と見る。

しかも多かれ少かれ今日の客観的な社會状態を反映してゐるものとして。かくて社會進化と共に、階級としてのプロレタリアート全體の意識も進化し、その意識に應じて階級闘争が進展する。勿論その中の少數のものが理論によつて此の階級意識を深め、より高度なる闘争の形態を認識し得ることを妨げないのだが、これ等の人々によつて指導される階級闘争と雖も、全プロレタリアートの有する階級意識を飛躍的に超越した闘争となり得ない。自ら、この現實的な階級意識に制約せられざるを得ない。これ等の前衛分子は、此の階級闘争を指導することによつて、客観的な社會状態の變化すると共に、更にこれに應じたヨリ高き意識に全プロレタリアートをヨリ急速に高めるために準備せねばならない。われわれが大衆の要求するものをわれ等の要求とすることも、たゞこれがために外ならない。此の點については、山川均氏が社會科學の理論闘争號に「私はかう考へる」といふ論文を發表せられて、詳細に論ぜられて居られるから、是非「私はかう考へる」を本書と共に一讀せられんことを本書の讀者諸君に御願ひして置く。

ルカッチとルダスとの論争も實にこゝに在る。ハンガリー××黨の指導者として、またコムミンタインの指導者として輝やける彼は、ルカッチが誤まれる階級意識論を宣傳することに對して、プロレタリアートの階級意識は「實在してゐるプロレタリアートの意識」であるといふ立場から敢然とし

て抗議したのが本書である。丁度本書の論争の對象となつてゐるルカッチの階級意識論は、友人米村正一君の譯になり、同人社から「階級意識とは何ぞや」といふパンフレットになつて發刊せられてゐるから、併せ讀まれんことを乞ふ。

一九二八、一、七、

譯者

目次

- 一、緒論……………三
- 二、リツカート學派に於ける『歸屬問題』……………五
- 三、ルカツチに於ける『歸屬問題』……………一六
- 四、マルクス主義に於ける因果律と歸屬問題……………三〇

マルクスの階級意識論

『意識に関する言葉は消え失せる。その代りに眞の知識を取入れなければならぬ』
(マルクス・エンゲルス)

一 緒 論

私は前の論文(註一)で、専ら、同志ルカッチのエンゲルスに対する駁論を取扱つた。私は此の駁論が、全體的に纏まつてゐるといふばかりでなく、それがルカッチの哲學の根本的傾向のありつたけを最も恰好に曝け出してゐるが故に、さうしたのである。私は、斷乎として、この前にはルカッチのエンゲルスに對する駁論を次のごとく分析したのだと主張する。

一、此の駁論は全く誤謬であること。
二、この駁論は、論理的に見てもマルクス主義的に見ても、ルカッチ程の哲學者やマルクス主義者には珍らしい誤謬の上に立つてゐること。

三、此の初歩的な誤謬はすべて——正にかう云へるのだが——たゞ同志ルカッチが初めから觀念論的、不可知論的に考へてゐたので、マルクス・エンゲルスを偏見なしに讀めなかつたがために外ならないこと。かれ等の講義をブルジョア的、哲學的な色眼鏡で觀察し(註二)それがため世界中で最も簡単な事を混同してゐること。

四、かれは観念論者であるばかりでなく、自己撞着してゐる観念論者であること。

註一 『労働者文學』(„Arbeiter-Literatur“) 第九號參照。

註二 われわれは本論文の終りに於いて、かゝる事實そのものが、驚いたことには、本當であることを發見するであらう。

此の最後の結論は、私が本論文に於いて最も重大視せんとするところのものである。

一、著述家とかあるひは思想家だとかが折衷主義者であるといふ場合は、それ自身決してよい現象ではない。何となればさう云ふことは、かれが未熟な階級の代辯者であるか、さもなければ、爛熟した決定的に考へる社會的諸階級の中間に介在してゐる中間層の代辯者であるか、いづれかであるからである。

私は、此の——さして新しくもない規定に重きを置くのは、私の最後の論文に於いてルカッチの哲學にその思想を客觀的に反映してゐる所の社會層を探究しようと思ふが故にである。

二、だが、私は、既に、此の論文に於いて、次のことを示さうと思ふので、かゝる規定に重きを置くのである。即ちルカッチは、一般的に見て、観念論者としても首尾の一貫せぬもの、即ち折衷主義者であるばかりでなく、特殊に見れば、かれの理論の重要部分には、ブルジョア哲

學者竝に社會學者から諸要素が取入れられてゐるが、しかも、ブルジョア思想家の場合には、かかる概念、あるひは理論を、理解さしてゐる前提も結論も取り入れずに、それがと云つて、何も知らぬものが、マルクス主義を直接に曲歪するがごとくに、かゝる諸要素を丸呑みするといふこともなく取入れてゐるといふ事を證明しようと思ふからである。かれは、マルクス主義を、マルクス主義と矛盾する諸要素と混和する——即ち、陳腐な、自己撞着した結論をつくり上げる。

そして、最もわるいことには、かれは、實に、あるブルジョア哲學者あるひは社會學者の反動的な反面を受け入れてゐる。——勿論それを基礎として反動的結論を抽出さうとはしてゐないが、だが、結論は、よし引き出されてゐないにしても、あらゆる理論につきものなのである。

だから、此の教義(ルカッチの——譯者)はリツカート及びウエーバーに於ける所謂「歸屬問題」である。

二 リツカート學派に於ける「歸屬問題」

さて所謂「歸屬問題」とは一體何か？

名稱から見ても分る通り、未知なるものを他の既知のものに「歸着」する事である。この名稱は、數學から由來したものであつて、そこではそれは世界中で最も簡單なる事柄を意味する。二つの級數 x と y が、互に、 y の價が x のいかなる價とも一致する關係に在るものと假定せよ。 x と y とが互に函數的に依存し合つてゐるものとすれば、かういふことは明らかである。

$$f(x) = y$$

さて、われわれに、 x の種々なる價が分つてゐるとせよ、即ちその際 x に一、二、三、といふ價を順次にとると假定せよ、然らば y の價は x の價に歸着せられねばならない。此の問題は數學に於いても必ずしも簡單な問題ではない。だが難しいにしろ易しいにしろ、いづれにせよ、此處ではただ概念だけを明らかにしようと思ふのだから、そんなことはどうだつてもよい。で、何れの歸屬問題に於いても、既知 (x) と未知 (y) とがなければならぬし、後者は前者に「歸着」されなければ

ならない。こゝに於いて、私は先づ第一に更にわれわれにとつて後に非常に重大なるもの——此の問題の本質的な特質であり、われわれはいかなる理由があらうとも實に此の特徴を挙げなければならぬのだから——を挙げようと思ふ。それは、二量 x と y とが、數學に於いては、勿論、因果的關係に在るのではなく、函數關係に在るといふことである。因果關係は、數學に於いては、何等の意味も持つてゐない。 x を變化させた原因がどうであらうと、此の變化はそれと共に y の變化を招く。それかと云つて y の變化の原因が x だと云ふことは出来ない。 x の各價に y の價が對應する——だが x のいかなる變化といへども、 y の變化の原因とはならない。何事も起らない數字に於いてはかう云ふのは全く妥當である。だが、リツカートやウエバーのやうな哲學者並に社會學者は、かゝる「歸屬」といふ概念を、數學から哲學並に社會學に移植したのみならず、なほまた、その概念をその數學的結論と共に取り入れることによつて實に故意に社會現象界から因果を全く除去しようとするか、さもなければ少なくとも第二義的な（即ち無意味な）地位におしやらうとするのだ！ 因果關係からは、歴史に於いてもまた、（精々）函數關係がつけられる。かれ等にあつては、「歸屬問題」こそは、社會事象の正鵠な因果的合法則性を否定して、歴史から歴史哲學を、即ち歴史を形而上學的につくり上げ、社會學を社會事象の一般的法則を包括した科學から、一切の社會事象の合法的

認識否定の「科學」におしやらうとする目的に役立つのである。そしてかれ等には「歸屬」といふ概念こそ、數學に於いては最高の論理的歸結であるといふ概念の特質こそ、即ち互に歸着し合ふ既知と未知とは因果的には結びついてゐないといふ特質こそが、神様から授かつたごとくに見えるのだ！ だが、因果といふ概念こそ、實に社會現象の合法を否定するかれ等にとつては、目の上の瘤なのだ！

事實に於いて、リツカートの哲學や、ウエーバーに於けるかゝる「歸屬問題」とは、何であらうか？ 此の場合にもまた數學に於けると等しく互に歸屬し合ふ二量がなければならぬ。此の二量こそ、それは、所謂「文化價值」(x)と、社會内の他の一切のもの(y)とである。

かくてマクス・ウエーバーは云ふ、

「常に、無限にして多様性なる個々の現象の一定面、即ちわれわれが普遍的な文化的意義を與へるところのもののみが——それ故に、知る價值あるものであり、そののみが因果的説明の對象である。しかして、此の因果的説明自體もまた、完全に現實的に、何かの具體的現象から因果的に遺漏なく説明することは、常に、實際的に不可能なるのみならず、背理たるに過ぎないといふ等しい現象を呈してゐる。われわれは個々の場合に、事象の「本質的な」部分に歸着せ

いめらるべき原因、即ち因果問題のみを、即ちその場合、現象の個性が問題であるところのもののみを選び抜く。しかして因果問題とは、現象を類型としていかなる形式に所屬すべきかといふ問題ではなく、諸現象を結果としていかなる個別的な座に歸着すべきかといふ問題なのである。それは即ち歸屬問題である」(『科學論』第一七八頁)

私は、わざと「歸屬問題」を説明するのに、マクス・ウエーバーだけを引合に出して、リツカート自身或ひは一層ヒドク決定的に歴史の客觀的合法性を否定したジムメルを引合に出さなかつたのである。私がさうしたのは、常に、これ等の歴史論が、あらゆるマルクス主義者には十分に明らかなことであつて、かれ等によつて否定し盡されてゐるといふ理由からばかりではない。むしろ同志ルカッチが自身の歸屬問題を述べる時に、先づ第一にウエーバーの表現方法を念頭に置いてゐたといふ理由からなのである。さて、勿論、ウエーバーの表現方法は、ウインデルバンド及びリツカートの理論そのままでない。何となればウインデルバンドやリツカートに於いては、表現方法が(既に明らかなるごとく)純粹に不可知論的であつたから。

「文化科學」の「文化價值」は、夫々独自の歴史哲學によつて規定されねばならないものである。私の論文は、同志ルカッチの著書を題材にしたのであつて、リツカートの哲學を題材にしたので

はないのだから、これ以上深く突き入ることはしない。

マクス・ウェーバーは、一方では、文化價値の規定を、その時々に変る歴史家の興味に任せ、そして此の興味自體を更に社會學的に決定することをしないため、既に自己矛盾に陥つてゐるに反し、他方では、因果的關聯を斷乎として否定し去るには、アマリに實際家であり、社會學者であり、そして經濟史家である。だがこゝで引用されてゐる引用文（それにはどうにでも、更に、つけ加へられ得たのだが）は、明らかに、全リツカート學派のものと、同じい、不可知論を現はしてゐると云つても差支ない。何となれば、『因果』といふ名稱の裏には、自然科學あるひはマルクス主義——われわれは敢へてかう云ふ——に於いて、かゝる名稱を理解するとは、全く異なるものが隠されてゐるからである。自然科學に於いては、二つの（あるひはそれ以上の）事象——互に原因と結果として結びつけられてゐる——が、任意に取り換へることの出来るものであつたり、願望や「傳統的な認識目的」に委ねられるものであることは不可能である。そして前に結果であつたものが、直ちに結果の原因であると観ることは出来ない。また原因であつたものが、今度は、同じ原因の結果であると思ふことは出来ない。（私は此の場合、交互作用といふ概念をしばらく置いてゐるのである。交互作用に在つては、『原因』だとか『結果』だとかといふ概念の明確な規定を問題とする。）それで例

へば、地球上の生活は太陽のエネルギー放射の結果ではあるが、地球上の生活——それを「文化價値」が決定するにしても——は、遂に太陽のエネルギー放射の原因だとは觀られ得ない。あるひは、マルクス主義に於いて、資本主義の「精神」は——極く大ざつばに云へば——資本主義的經濟組織の結果ではあるが、資本主義的經濟組織は、資本主義的精神の結果ではない。しかるに、かゝる「精神」が、所謂「社會學者」に興味のある「文化價値」なのだから、それで、社會學者はそれを「選び」出し、それを中心として一切のものを集め——而して勝手に實相だと考へる、一般的に云へば——

自然科學に於いても、またマルクス主義的社會科學に於いても、因果（あるひは交互作用）とは自然竝に社會力であつて、その力が、諸現象を皆現實に於いて與へられて勝手に變更し得ない一定の關係に齎すのである。そしてわれわれの使命は、かゝる因果關係を、體験的に經驗の中を探ることには在り得ないのであつて、決して「認識目的」にしたがつてそれを組立てることには在り得ないのである。個々の事實のみならず、全系列の事實も亦、互に因果的に依存し合つてゐるといふ關係が一般的關係なのである。かくのごとき法則が、例へばダーウインの進化法則であり、あるひはマルクスの、社會が生産行程と政治的その他の精神的行程とが依存し合つてゐるといふ法則なの

である。

それ故に、自然科学に於いても、マルクス主義に於いても、リツカート學派のものやウエーバーに於けるがごとく、『歸屬』問題が起らない。マルクス主義に於いては、社會的事象の複合體に於いて何が原因であり、また何が結果であるかといふことは、決して疑はしいことではない。また、かかる複合體中何が重大であり、また何が重大でないかといふことも、同様である。具體的事實に在つては、その事實を、いつれの原因に歸着したらよいかといふ疑問は、本當に起ることだが、事象複合體の合法的結合順序などは、何等疑問を挟む餘地がないのは、分り切つたことである。それ等の具體的事實が、因果的に結びついてゐるといふことも、いかにして、即ちいかなる順序で結びつけられてゐるかといふことも、疑はしいことではない。實に、かかる順序こそ、マルクス主義的社會學によつて規定されてゐる。マルクス主義的社會學は、諸現象自體の中に現に包含せられてゐるものは何であるかといふことのみを論及せんとするところの、經驗的な、實驗によつて獲得された理論である。此の點に於いて、マルクス主義は、純然たる自然科学である。

實に、以上のことは、『歸屬』によつて否定される。

歸屬は言ふ——現實がどうであらうと、われわれはその現實を認識する（「完全」に認識する）を

得ない。何となれば『遺漏なき因果的説明は、單に背理たるに過ぎぬ』から。といふよりは寧ろ、われわれが普遍的文化價值を『與へる』諸現象『のみ』が知る價值のあるものであるから。で、われわれは『事象の本質的な部分』を『選び』出す——此の『選擇』には、何等規範が提供されないか、あるひは外來の哲學によつて提供されるかなのであるのだが——かくて他のものは、此の本質的な要素によつて、重要性を得る。即ち本質的なものになる。といふのは、『本質的なもの』と結びつけられるから。しからば、此の『本質的なもの』とは何であるか、それはいかなる理論と雖も云ふことが出来ない。即ちあるものにはナポレオンが一八二二年二月三日に感冒に罹つたといふことが、此の『本質的なもの』であり、他のものには、ナポレオンがビュルナーの鼻がアマリにも大きいと思つて見たといふことが、此の『本質的なもの』である。だから、理論のみでは何にもならないのだ！ 歴史は決して繰返さない『個別的の座』からなる。此の個々の座は、いづれも、それ自體の中に、中心的な文化價值を持つてゐる。それに、此の座の他の『特質』を、『因果的に』歸着せねばならない。

此の場合、『因果的に』といふ言葉が、何を意味してゐるかは明らかである。即ちあらゆる歴史上の事象は因果的ではあるが、明確なそして實在的な、したがつて確然たる事象といふ意味に於いては

はなく、勝手に、選擇した中心問題と關聯さしてである。われわれが、中心問題を、即ち文化價値を別個に選擇すれば、因果的關聯もまた異つたものとなる。あらゆる點に因果があるとすれば、因果的關聯といふことは絶對である——但し、因果的關聯が、われわれの意志と關係があればである。

これは、惡粉裝した不可知論であり、いかなる正鵠な理論をも否定するものであるなどと、これ以上の言葉を費すことは、時間の空費である。第一に、マクス・ウエーバー自身が不可知論であると云つてゐるから(『因果問題は……現象を類型としていかなる形式に所屬せねばならないかといふ問題ではない』と)

第二に、かれが、かれの宗教社會學に於いて、『世界宗教』を經濟構成の原因であるといふ際には、かれの理論から、例證を挙げたにもかゝらず、『事實的材料』が山をなしてゐる場合に臆病にもこれ等の材料を一の『形式』にあてはめること、即ち社會生活の法則を述べることを避けるやうな『社會』經濟史』を書いてゐるから。

兎に角、歸屬問題といふものは、本當に、リツカート・ウエーバーの前提と共に興り、また亡びる無理論の理論たるに適はしい。だからかゝるブルジョア思想家の前提がなければ、意味のないものであり、又かゝる著述家の結論がなければ、一層、慘めなものなのだ！ 何となれば、社會的事

象が、『個々の座』からなるものと假定せよ——しからは、マルクス主義的社會學の意味に於ける合法則性などいふことは云々し得ないのは當然なことであるからである。したがつて、『因果』といふも、一種獨特の語法を持つて來るといふことも當然なことである。歴史的形而上學(リツカート・レルチ)あるひは偶然(リツカート)によつて、その時々、決定されるところの『文化價値』が、第一義的な役割を演ずるに反し、因果は、當然の結果として、第二義的な階程に沈められてしまつてゐる。こゝに於いて、われわれは、次のごとき論理的關聯を發見する——

大前提——歴史に於ける本質的なものは、文化價値である。これは變化するが、個別的である。

小前提——したがつて、歴史は『個々の座』からなる。そしてその『個々の座』は、各々その時々々の文化價値の支配にしたがつて、内的に『關聯してゐる』。

結論——それ故に、社會事象の因果的合法則性、即ち、『個々の座』を、法則にしたがつて、因果的に結びつけるやうな理論は、決してない。『因果問題』は、一個の『歸屬問題』である。

大前提及び小前提が振り落とされ、合法則性の可能性を否定すること——その論理的歸結が歸屬論なのだ——もなくして、そして結論からのみ、歸屬理論が支持されてゐるとしたならば、最も甚しい矛盾に陥つてゐるものだ！、本來は否定すべき筈の因果的合法則性を代表する役割を演じて

あるやうな歸屬といふ概念を——因果的合法性を否定もせず——受け入れてゐるのだ！ 以上のことは、最高の自己撞着である以外に、また、救ふべからざる自己撞着だ！

これといふのも『歸屬』なる概念がリツカート學派に在つて、いかなる役割を演じてゐるかが、意識されてゐるものとすれば——因果といふ舊概念が、『歸屬』と兩立し得ない場合には、此の概念を用ひることを避けてゐるがためなのだ！

さうでなくして『歸屬』といふ概念の役割が、いつこにあるか、即ち因果の否定を意味することの本當によく知つてゐるのだとすれば——かゝる見解に惹きつけられて、いろいろな『關聯』即ち『意味』によつて、因果自體を世界から放逐しようとしてゐるがためなのだ！。

最後にそれでもないとして、何がなされ、どういふ攻撃がなされてゐるかといふことも知らずに、無茶に、反動哲學の武庫の中から、概念が引き取り出されてゐるのだとしたならば——そのことが一體何を意味するか、そのことを判断することは、讀者諸君に委せよう。

三 ルカッチに於ける「歸屬問題」

ルカッチに在つては、いかなる場合が見出されるか、われわれはそれを觀察するであらう。

先づ第一に、われわれは、かれが『歸屬』してゐることを述べよう。かれはプロレタリアート（竝に他の各階級）の『階級意識』を次のごとく定義してゐる。

「したがつて、具體的研究とは、全體としての社會關係を意味する。何となれば、かゝる關係に於いてはじめて、人間が生存上持つところのその時々意識があらゆる本質的職能を現はすからである。かゝる意識は、一方に於いて、主觀的に社會的歴史的状態から見て、當然なもの、理解し得るもの、そしてまた理解すべきもの、したがつて所謂「正しい意識」のごとく思はれるが、と同時に、客觀的に、社會進化の本質に一致してゐないもの、即ち社會進化に適當に觸れてゐないもの、そして適當にこれを表現してゐないもの、したがつて「誤まてる意識」のごとくにも思はれる。他方に於いて、同一關係内に於ける同一意識も、主觀的に、自立的な目的を缺いてゐるものであるごとく思はれると同時に、それにとつて未知な望ましからぬ、社會

進化の客觀的目的を追求してゐるものごとく思はれる。かくの如き「誤まてる意識」の二重的な辯證法的規定は、意識を、人間が、一定の歴史的條件の下に、即ち一定の階級状態等々に於いて、實際的に思惟し、感覺し、そして意欲したところを、單に叙述すること以上に取扱ふ。單なる叙述は——たしかに非常に重大ではあるが——單なる眞の歴史研究の素材たるに過ぎない。具體的な全體性に於ける關係及びそれから結果せる辯證法的規定は、かゝる單なる叙述以上に出でて、客觀的可能性といふ範疇を生ずる。人間が、かゝる状態を、即ちその状態から直接的行爲に關して生じた利害と全社會構成——かゝる利害に適合せる——に關して生じた利害とを、完全に理解する能力があるとすれば、したがつて、人間の客觀的状态に適合してゐる思想があれば社會全體に關する意識が現はれて、人間が一定の生活状態に於いて持つであらうところのあらゆる思想、感情等々を認識する。かくの如き生活状態の數はいかなる社會に於いても無數に在る譯ではない。よし、その生活状態の諸型が、突き進んだ個々の研究によつて更に一層醇化されたにしても、しかもなほ二三の明らかに區別される基本型——その本質が人間の生産行程に於ける地位の型によつて決定せられるところの——が現はれる。さてそこでかくのごとく生産に於ける一定の典型的な状態に歸屬せられるところの、合理的に適合した反作用が

階級意識である。したがつて、此の階級意識は、個人——階級をつくつてゐる——が思惟し、感覺し等々する事の和でもなければ、平均でもない。それにもかゝはらず、結局に於いて、全體としての階級の歴史的に重大な行爲は、この意識によつて決定されるのであつて、個人の思惟その他によつて決定されないし、またかゝる意識からのみ認識され得るものである」(圍點はエル・ルーダスによつて附されたもの)(ルカツチ『歴史と階級意識』第六一—六二頁、水谷米村兩氏譯『階級意識とは何ぞや』第一一—一三頁—譯者)

だが、かくして、眞の社會的所産といふことから、社會現象の全體の中に、因果的に生じ、自分以外の全體と因果的に關聯してゐるところの階級意識といふことから——一の妄想がつくられる。此の妄想は、あらゆるつくり上げられた妄想と同じやうに、神秘的なヴェールに包まれてゐて、幽霊や魔法を流布し、一見恰も眞の實在である場合よりも大なる力を持つてゐるものごとくである。現實的な人間意識は、實際の歴史には非常に局限せられた作用しか及ぼさないのだが、かくのごとくに「歸屬せられた」意識は、「究極的に」全體としての階級の歴史上重大な行爲を「決定する」のだ！ しかもこの意識は現實性を持つてゐないものである。即ち個人の中に心理的に體現せられたものでも、群集心理的に、大衆の中に體現せられたものでもない。それは全體としての人間だけし

か持つてゐないやうな……思想、感情等々……があるとすればある意識なのである。

同志ルカッチは、自身の神秘性を裏書きするために、再びマルクスを引合ひに出して来る。かれは『神聖家族』から、次のごとき一文を引用し、これを『階級意識』といふ表題のモットーにしてゐる。

『個々のプロレタリア、あるひはプロレタリアート全體までもが、一時、目的と考へてゐるところのものが問題なのではない。プロレタリアートが實在し、この實在に適合して、歴史的になさざるを得ざらしめられるところが問題なのである』

そしてかれは、以上のマルクスの文章を、彼の常套手段によつて、解説してゐる。即ちマルクスの文章から、そこにはないものをつけ加へて読み、ルカッチがあればいゝと望んでゐるところのものを読み込まうとして次のごとく云つてゐる。

『モットーに述べられてゐた通りに——階級意識とは、個々のプロレタリアの心理的意識、あるひはその總體の（群集心理的）意識ではなく、階級の歴史的状態の意識せられた意味である』

（ルカッチ前掲書第八六頁、水谷、米村兩氏譯前掲書第三一六四頁—譯者）

扱て、われわれは、ルカッチの階級意識論を解剖するに先立つて、なほ實驗に於いてあらゆる邪

魔になる副次的諸現象を遠ざけるために小さな注意をしよう。ルカッチによれば——最後に掲げられた引用文によれば——『階級意識とは、個々のプロレタリアの心理的意識でもなければ、その總體の群集心理的意識でもなく、階級の歴史的状態の意識せられた意味である』。よろしい。各階級は、歴史的状態を持つてゐるし、またかくのごとき各状態は、いづれも『意味』を持つてゐる。さういふことは、全く、リツカート・ウエーバーの言動であつて、われわれは、此の『意味』といふことの背後に舊い倫理的合理的歴史觀の遺物及び——觀念論の燒直しを見出す。誰か（例へば神でも）が、世界に『意味』——世界が目的としてのそれに向つて自身を『完成』せねばならないところが——でも與へたとしたら——世界に於けるあらゆるものは『意味』を持つてゐる。だが、石の落下もプロレタリアートの階級闘争もいづれも、自然並に社會法則にしたがつて進んで行かねばならないといふ『意味』以外の意味を持つてゐない。階級の『歴史的状態』と此の階級の歴史的状態の『意味』とは、觀念論者にとつてのみ違つてゐるものだ。

實際にはかうである。

『歴史状態』とは何か！ ある状態は、他の状態のいづれとも等しく、人間の意識から獨立に——それを通じてではあるが——かゝる状態を超えて進んで行く。私がこの状態の『意味』を論ずると

したならば、それは、いかなる意味を持ち得るか？、同じことを二重に論じてゐるのだ。唯物論者達は云ふ——客觀的に、したがつて人間がいかにそれを認識するかといふことは獨立に、起るところのものは、同時に思考能力のある人間によつて、更にまた把握される。石が平面に落下すれば——落下の法則が認識される。××や××が倒されると——社會法則が、即ち××の法則が、認識される。かゝる『認識』が、その状態の意味である——それ以外の何物でもない。そして此の意味は、——既に云つたやうに——事象に關する思考能力を與へられてゐる人間の心理的過程である。しかも實に、此の心理的過程そのものこそ、生理的過程の他の（特に限定された）一面に過ぎないものであつて、何等超生理的過程即ち超感覺的（註）なものでもない。また認識された、意味を持つてゐる過程もまた、人間によつて認識されるがごとく客觀的過程そのものなのである。それ故に唯物論者は云ふ——

『階級の歴史的状態と此の階級の歴史的状態の「意味」とは異つたものではない』と。

註 フォイエルバッハは曰はく（著作集第二卷—第三四八頁、ブレハノフの引用による）『私は、私に對しては心理的對象であり、他人に對しては生理的對象である』と。

しかるに、觀念論者は云ふ——

その二つは異つたものだ。各『過程』は、いづれも、夫々『意味』を持つてゐなければならぬ。即ち目的に向つて向上するといふ意味を持つてゐなければならぬ。世界（自然並に社會）は、世界を向上さす最終目的を持つ筈がないなどといふことは出来ぬ。目的がなければ『無意味である』。したがつて、自然あるひは社會の過程を研究すれば、事象の因果的結びつき以外に、そしてそれ以上、當該の事象をそれに向つて向上さすところの目的がある。そしてそれは自然及び社會が持つてゐるところの、そして當該の事象がそれを實現する手段となるところの目的である。此の終局あるひは目的を實現する手段となるやうな事象のみが、『重大な』あるひは『歴史上重大な』ものなのである。

御覽の通り、これがリツカート—ウエーバーに於いて知ることの出來た所謂『價值』であり、『文化價值』の類である。

あるリツカート主義者が進歩的な男であつた——われわれは、社會民主主義あるひは共產主義者さへも云つてゐるのだが——と假定せよ、かれは今日の××時代に於いて、『此の××はいかなる「意味」を持つてゐるか？ それは人類にとつて完成を齎すかそれとも齎らさないか？』といふ問題を提出することをいつまでもやつてゐるだらう。かれが『完成』（正義あるひは民主主義等々）と解

するところにしたがつて、例へばロシア革命を是認したり、あるひは妨害したりするであらう。

約言すれば、観念論者達にとつては、歴史的状態は評價されるといふ「意味」を持つてゐるのだ。

マルクス並にエンゲルスは、いつも斷乎として、マルクス主義を「價值判斷」を以つてブチ壊しをやることに反對した。(『反デューリング論』第一六一頁、あるひは「哲學の貧困」のエンゲルスの序文第十頁を参照せよ。)個人もしくは全階級が下す價值判斷——それに於いて何物かが道徳的に賞讃されるか非難されるのであるが——は、それ自體因果的に説明される。

かくの如き價值判斷は、社會過程内に起つた變革のあらはれである。即ちそれをかゝる形式で告示してゐるところのものである(例へば、賃銀奴隷がその本質が認識されないにしても道徳的に非難されるが如き場合)。だが、プロレタリアートの階級意識が價值判斷からなつてゐると主張するものは、すべてのものになり得るがマルクス主義者にだけはなり得ない。

だが、同志ルカッチが「階級意識とは、階級の歴史的状態の意識された意味である」と云つてゐる場合、かれは、——上例によれば——「歴史的状態の意味」とは、以上のごとき價值判斷であると云つてゐるのか、さもなければたゞ、社會的事象の合法的な進行及びその傾向の認識を意味してゐると云つてゐるだけのことが、何れかである。あとの場合であつても階級意識はそれに止まつ

てゐない。それについては、なほ論じなければならぬであらう。さうなれば勿論大體に於いて私をはかれに同意する。それにも拘らず、どうしてこんな簡単な事實をそんなに観念論的氣迷的に述べてゐるのか、全く驚くべきことである(註)。マルクス主義者ならば、かくのごとく鼻持ちならぬ危険を避ける爲に別な言葉を選んだであらうに。そしてかう云つたであらう。即ち生産力の各段階は社會を一定の(理論によつて認識され得る)方向に生長さす。この方向は、状態に應じて「ヨリ高度」にもなれば「ヨリ低度」にもなるし、また「發展」もすれば「退歩」もする。これがマルクス主義者にとつての「意味」であつて——それ以外には何でもない。かゝる方向(＝傾向)は認識され得るものであり、また意識され得る。傾向が發展することであれば、意識に於いて追求せられるところの、また結局に於いて實現せられるところの(邪魔になる原因が干渉さへしなければ)使命として現はれる。方向が「退歩すること」であれば、それを防止することが試みられ得る。そのことは恐らく成功するであらうが——恐らく殆んどないであらう。いかなる場合があるかといふことを認識することは、實に理論の機能である。社會的進化が進行する方向が、どう云ふ風にして、またいつ意識されるかされないかは、われわれにとつては、こゝで究明すべき問題ではない。兎に角、その方向が意識されるとせよ。然らば、リツカート・ウエーバー・ルカッチの表現方法をかい

つままで次のごとく云ふことが出来る。即ち（社會のあるひは階級の）『歴史的状态の意味とは、意識されたものである』と。だが、私は質問する、『どこでそれが意識されるのか？ 誰に於いて意識されるのか？ いかんして意識されるのか？』と。

註 同志ルカツチの場合は、全く明らかに、第一の場合なのだ。それを、われわれはあとで述べる事が出来るであらう。

かゝる意味は個々の人間（云はばプロレタリア）に於いて意識されるのか、階級の一部分があるひは全體に於いて意識されるのかどちらかである。また第三の可能性があるか？ 人間は、これまで自身の歴史的状态を意識して来なかつた。何故に意識しなかつたか？ またかれ等は自身の歴史的状态の代りに何を意識してゐたのか？ さう云ふことは別個の問題である。今や、かれ等は、何等かの理由から、自身の歴史的状态を意識せしめられたのだ。

そのことは、今や、それ丈人間の頭の中に全く心理的に、以前とは異つて、現實にヨリ多くあるひは完全に一致した思想、感情、目的等々が存在してゐるといふことではないのか？ 『意識される』といふ言葉は、外のことも意味し得るのか？ しかもこの新しい思想、感情、目的等々が『歴史的状态の意味』といふ言葉で一括されるといふことは、それ等が意識されるといふ、即ち、心理

的に經驗され、また經驗されねばならないといふ事實を——もしもそれ等が意識されるものとせば——何も變へないではないか？ 然し乍ら、さうだとすれば同志ルカツチは——既に屢とあつたやうに——再び更にかれの常套的な論理的（失策的）飛躍を犯したのだ。換言すれば、かゝる飛躍は、今や、曖昧とか見當違ひを意味するのではなく、たゞ單に——矛盾以外を意味してゐない。しかも決して辯證的矛盾ではない。同志ルカツチは、かれの立論の第一部では、第二部で是認してゐることを否定してゐる。かれの立論の第一部は、第二部と完全に矛盾してゐる。第一部では、階級意識とは、個々人の心理的意識でもなければ、多數人の群集心理的意識でもないと主張してゐる。しからばさうなると、同志ルカツチは階級意識が實現せられる第三の場所を發見したと信ぜれる。第三の場所とは恐らくは、神あるひは神々の頭か、乃至は恐らくは歴史の神かそれに似たもの頭であらう。ところがさうでもない。かれの言の第二部では、第一部で否定されてゐることが述べられてゐる。何となれば、階級意識とは『階級の歴史的状态の意識された意味』であると云つてゐるからである。だが——既に云つたやうに——階級意識が實現され、人間によつて意識されるところは、人間の頭しか在り得ない（個人心理的にか、あるひは群集心理的にか）人間によつて意識されるもののみが、したがつて、意識の内容のみが、立論の第二部に於いて、ルカツチによつて、ヨリ嚴密

に「歴史的状態の意味」だと規定されてゐる。しかしながら、失禮だが、そんなことは、全然別個の問題なのだ！人間の意識の内容が何であるかといふこと——この内容が現實と一致して居ようが居まいが——は、それ自身一個の問題である。しかしその問題は、意識が心理的か、それとも群集心理的かといふ問題とは、何等関係のないことだ！内容が眞實であれ、誤りであれ、「歴史的状態の意味」を表現してあれ、また居らないであれ、いづれにしても、かゝる内容を包含してゐる意識は、個人心理的であるか、さもなければ群集心理的であるか、どつちかだ。たゞ一個の場合に於いてのみさうでない。それは即ち「階級の歴史的状態の意味」が、この意味そのものが、珍妙な特殊的な意識——人間の個人的意識と別個のものであり、人間の頭脳の上に君臨してゐる——といふやうに「意識される」場合である。ともあれ、いま（假装した）神が眼の前に居るのだ！（哲學的に云へば、それは三位一體と呼ばれてゐる。）したがつて、精々よくて（あるひは悪くて）、同志ルカツチの所謂「歸屬された意識」といふものは、三位一體式の意識——神に非常によく似た意識である。

だから、同志ルカツチよ君はとんでもないことをしてゐる。君は、君が論證しようとしたことを論證してゐない。ヨリ適切に云へば、君自身が矛盾してゐるのか、さもなければ、君の立論の中に

二つの全く異なる世界の問題が結びつけられてゐるからだ！君の立論の第一部では、第二部と全然異つた事を云つてゐるのだ！第一部では、意識について（それが個人心理的であらうと、群集心理的であらうとまたそれと全然異なるものであらうと）、第二部では、意識の内容について論じてゐるのだが、それについて、君はまた同時に、意識の内容もまた意識せられると述べてゐる。どこでだ？君が既に第一部で既に——魔法で世界から追拂つた意識に於いてでだ！君は、かの小心翼々と憂へてゐる妻の「誰がお身を、私から奪つて行くのか？」といふ質問に對して、「オ、私の馬よ、私の子供よ、私の馬よ！」と答へたシエクスピアの馬鹿者バースンのごと、振舞つてゐるのだ！

だが、此の「小さな注意」は、枝葉の問題ではなくて、われわれを全問題の中心に、即ち核心に投ずるものであることは、明らかである。ルカツチが區別してゐないにしても、人間の意識とは何であるかといふ事と、またかゝる意識の内容とは何であるかといふことを、われわれは嚴密に區別しなければならぬ。何となれば、人間の持つてゐる思想、感情、目的等々が絶えず變化しても、意識内容とは何であるかといふことは明らかであるからである——即ち各一定期間内に於いて、人間はその頭の中に、此等の意識内容といふものの複合體を持つてゐる。そしてこの複合體が、實に「意識」と呼ばれてるといふことは明らかであるからである。そして此の意識は、個人に於いては心

理的に、或ひは大衆に於いては群集心理的にのみ實現され得るものである。かくのごとき「心理的に、あるひは群集心理的に實現される」といふことは何を云ふのかは、科學が決定する。しかも自然科學——心理學（群集心理學）——がこれを決定する。これがマルクス主義に對していかなる關係に在るか、そのことは非常に興味のあることであつて、しかもなほ十分に解決されない問題である。さうして此の問題の解決は、あらゆるマルクス主義者にとつては、常に緊急の義務になつてゐる。ルカッチが此の意味で問題を提供したのならば、人々はかれに感謝しなければならぬ。その解答が直ちにそのままに容れられないにしても——かういふ問題ならば少なくとも合理的でありハツキリしてゐる。だが此の——唯一の意味ある——問題は、同志ルカッチには少しも關係がないのだ。かれの研究は、哲學的になされてゐる。そしてそれこそ、マルクス主義の精神と相反するものだ！

四 マルクス主義に於ける因果と歸屬問題

しかしながら、此の場合には、問題を——既に述べた通りに——哲學的に提出してゐると云つてもよい——即ちそは形而上學的に提出してゐると云つてもよい。

「哲學的意識は次のごとく規定する——それにとつては、理解されたる思惟が眞の人間であり、かくのごときものとして理解せられた世界が、何より先づ第一に眞實の世界である」と（マルクス『經濟學批判の序論』第三六頁、第三十三頁參照——譯者）

云ふまでもなく同志ルカッチは、此の場合にもまた、マクス・ウエーバーに師事してゐる。マクス・ウエーバーは、『理解の』社會學——その諸範疇（根本概念）は、われわれが人間的行爲を理解し、それにしたがつて『説明』し得るといふことを目的にしてゐる——をつくり上げてゐる。で、ルカッチも亦、絶えず諸階級のそれぞれの「重大な」行爲が、いかなる意味を持つてゐるかといふことを問題にする。かれは、絶えず次のごときことを問題にする。即ち「いかなる生活事情が、いかなる事情がまたいかなる方法的關聯に於いて、認識に適切な事實と考慮するに値するか」（ルカッチ

しかして、かれは純然たるリツカートロウエーバーの精神に於いて、此の問題を、常に、哲學的に解いてゐる——即ち事實を先づ第一に事實として捺印するところの「認識目的」、あるひは發展目的にしたがつて解いてゐる。かれは、初めから規定せられてゐる認識目的を指してゐない人々、及び「事實」をそれにしたがつて選擇しない人々を、「粗雑なる經驗主義者」と呼ぶ。

此の言葉には、云はれること（ヨリよく云へば白狀されてゐること）よりもモット多くのことが意味せられてゐることが想像せられてゐる。もしもルカッチが歴史状態の「意味」——此の言葉は先に見たやうに、その他の點に於いても觀念的傾向に大いに傾いてゐる著者に於いては非常に曖昧なのだ——に、何等かの重大さを與へてゐるといふことを想起するならば。だが、かくのごとき想像は、われわれがかゝる認識目的「理論」が、非常にリツカートロウエーバーの文化價值——實に、「事實」がそれを目差さねばならないといふ「認識目的」である所の——の臭味あるといふことに思ひ至るや、直ちに、確信と變るのだ！ マルクス主義は、たつた一つの「認識目的」を持つてゐる——諸事實を因果的結びつきに於いて觀察しなければならぬといふ。諸事實の中で、何が重要であるか、また何が重要でないかといふこと、そのことは、諸事實がいかなる作用を持つてゐるか

といふ見點からのみ、明らかにされる。私は、事實に對して、誤まつた意義を與へることが出来る。即ち私は誤まつた事實を規定することが出来る。（例へば、あたかも、小ブルジョアジーの強大化を「規定」する時の修正主義者のごとくに、あるひはまたマルクスは自然に於ける辯證法を否定すると規定する時の同志ルカッチのごとくに）。レーニンは、かくのごとき所謂「事實」に對して、猛烈なる戦ひをなした（例へば土地の收穫遞減といふ所謂「事實」に對して）。

かくて、かくのごとき所謂事實は、全く訂正されてしまふだらうが、正しいものは、それにも拘らず、依然として事實である。勿論事實の關係は理論によつて確證される。だが、理論自身は、現實に存在してゐる事實關係の思考的表現に外ならないからであるに過ぎぬ。任意の理論はどれでも、妥當なる事實關係を表現してゐるのではなくて、眞の理論のみがさうなのである。そして「眞の理論とは」探究せられる事實の上に立つてゐる場合の理論である。世界はよし未だ把握されてゐないにしても、したがつて未だそれを説明する理論がないにしても、存在する。世界はあらゆる人間と物との實在的な關係と共に存在してゐる——世界がその後理解されるならば、かう云ふのが、その作用を誤まらない把握、理論、事實中の事實である。だが、決して次のごとく云ふことは出来ない。即ち、事實は理論にしたがふのであつて、理論は事實にしたがはないと。また決して次のご

とくいふことは出来ない。即ち「それ丈事實が悪いのだ」と。だが、哲學者はさう云ふ風に、云つてゐる。したがつて、哲學者にとつては、事實は、次のごとき場合に於いてのみ事實であるに過ぎない。即ち事實が、かれの理論に適應してゐる場合、事實がかれの「認識目的」によつて「適切なもの」となる場合に於いてのみ、事實であるに過ぎない。哲學者にとつては——ルカッチにとつては——理解された思惟が眞實の人間であり、理解された世界が眞實の世界なのだ。

扱て、人間が意識を持つてゐるといふことは事實である。此の意識は人間に於いてもまた一定の——重要な——役割を演ずる。社會理論はいづれも、先づ第一に、かういふ世界事實で満足しなければならぬのだが、それなのに、かゝる事實が、人間の精神史に於いて全く重大な役割を演じた觀念論者の出發點であつた。かゝる意識とは何か？ またかゝる意識は歴史上いかなる役割を演ずるか？ マルクス主義は、それに對して明瞭な、そして嚴密な解答を與へてゐる。それは即ち私が、人間は意識を持つてゐるといふ事實を確認することであり、私が歴史を追跡して、かゝる意識は歴史上かくかくの役割を演ずると主張することである。だが、以上のことは、私にとつては、かゝる意識を否定することにはならないのだ！ さうでなければ、この意識に代ふるに何處にもない見出されない、知られてゐない「つくり上げられた」意識を以つてすることであり、それは私の概念の中に

しか存在してゐない鳥若しくは魚である。そんなことは哲學的な問題提出であり、同志ルカッチが問題にするのだ！

事實に於いてはかうである——

人間は意識を持つてゐる。そして此の意識が世界の運命を決定するのだとさへ考へてゐる。(われわれは同志ルカッチさへもが、かう考へてゐるといふことを知るであらう)。人間は思想、感情を持つてゐるし、目的さへをも提示する——そして人間は、かゝる思想、感情が、歴史に於いて、重大な、そして何等拘束されぬ役割を演ずるときへ思つてゐる。かゝる目的が、歴史に於いても、また實現される目的だと思つてゐる。唯物論者は、人間のかゝる見解と、斷えず闘争して來た。いろいろな時代の唯物論的學說の特殊の形態のものによつて、人間の意識は、いろいろなものに、歸着せられた、最後に、近代的なマルクス・エンゲルスのマルクス主義に至つて、人間の意識は、窮局に於いて、人間の經濟的構成に歸着せしめられた。しかもつくられた意識ではなく、生々とした人間の頭の中に實現せられてゐる意識である。だが、いかなる形態の唯物論にも、一つのことは共通してゐる。即ち——人間の意識とそれを廻つてゐる世界(社會)との間には、因果的關聯があるといふことがだ！ 人間の意識は、その周圍に在る世界の所産である。しかも、そんなことは、

初歩的な真理である。だが、悲しむらくは、われわれと同志ルカッチとの全論争は、此のマルクス主義的唯物論の初歩的な真理を、廻つてゐるのだ。

しかしながら、この初歩的な真理が、『歸屬』とは相容れぬのである。何となれば、人間の意識は、他の事實と因果的に結びつけられてゐるところの、實在的な社會的生活事實であるか、あるひはさうでないかのいづれかであるからである。因果的に結びつけられて居ないとすれば、『歸屬問題』であるかも知れない。だが、因果的に結びつけられてゐるとすれば（丁度マルクス主義がさう取るやうに）かくのごとき因果的結合の種類が一層嚴密に決定され得るし、またかゝる事實の、意識の意義が嚴密に吟味され、人間の自身の意識に關する自惚れが訂正されねばならない——實在的な社會生活事實たる特に社會現象たる意識以外に、しかもなほ哲學者の概念の中以外にどこにもない他の假説的な意識、即ち理論が先づ最初に階級の客觀的歴史狀態を確證し、しかしてこれに應じてかゝる狀態を適當に（『忠實に』）反映してゐる意識をそれに向つて組立て、即ちそれに向つて『歸着』して後はじめ得られるところの意識はないのだし、またあり得ないと。勿論、人間の意識は、その社會的狀態に應じて、即ちその生産行程に於ける狀態、その階級的所屬に應じて、形づけられる。例へば、生産行程に於ける生活は、工業労働者の最も長いそして最も重要な部分である。工業労働

者が、機械に對する關係に於いて、かれの協力的生産者即ち他の労働者に對する關係に於いて、労働監視人に對する關係に於いて、そして最後に資本家に對する關係に於いて、そこで得た印象が、かれの意識の可成りの部分をなしてゐるのである。換言すれば——あらゆる人間がさうなのである。何となれば、階級社會に於いては、人間といふものはなく、階級人のみがあるからである。今日では、かれ等は、資本家であり、賃銀労働者であり、その他である。（例へばマルクス『經濟學批判の序論』第三五頁）（譯者註）それ故に、人間の意識とは、普遍的な人間意識（さう云ふのは、例へば、近代心理學、即ちフロイド主義の誤謬であるのだが）ではなくて、階級意識である。生産過程に於いて、同一の地位についてゐるものは、皆、多かれ少なかれ、本質的には同じ意識即ち階級意識を持つてゐる。

（譯者註）『現實なる前提の實在なもの、具體的なものから始まること、例へば經濟學においては全社會的生產行為の基礎であり主體であるところの人口から始まること』が正しいかに思はれる。が、しかし、よく考へると、其の誤まれることがわかる。人口といつても、例へばそれを構成する諸階級を度外視すれば、人口は一の抽象である。此の階級なるものも亦、それが基くところの要素、例へば賃労働、資本、等を知らなければ空語に過ぎない』（經濟學批判の序論』第三二頁）

だが、それと同時に、次のごとく云ふことが出来る。即ち、個々の人の意識自体は、初めから——社会的所産、階級的所産であると。個人の意識から、かれにのみ個人的に附随してゐるところの、即ち個人的にかれに役立つた撰つて除くならば、それ以外には殆んど何も残らないであらう。生れてから死ぬまで、人間は、社會人である——かれの意識は、かれの同胞との交際によつて、形づけられる。その際、かれは、たしかに、社會過程内に知識だとか干渉とかがなくして社會過程内に生じ、舊時代の人から新しい時代の人に殘されたところ、更にこの後の人に織込まれるところの意識内容を得る。われわれがもし、個人的の意識を論じまたそれと反對に社會的意識あるひは階級意識を論ずるとしても——それを以つて、個人的の意識の外に、何處かにまた別個の意識が存在することを少しも意味してない。それどころか、個人の意識は初めから社會化された意識であるにせよ、個人は、必然的に本質的な、あらゆる階級所屬に、典型的なる特質と相並べて、副次的な、偶然的な、即ち同胞といふ小範圍のものとの個人的交際から由來した内容をも示してゐて、更に、本質的な大多數の同じ階級のものから得た特質を缺くことさへ出来るのだし、また明らかに缺きさへしてゐる。

マルクス及びエンゲルスの次の文は一方に於いて、個人としての個人と、階級の成員としての個

人との根本的差異を、そしてまた他方に於いて、二つの場合の意識の差異を、極めて明確に、規定してゐる。

「個人は間接的個人としてのみ、即ちかれ等がその階級の生存條件の下に生活してゐる限りに於いてのみ、一の共同社會に屬してゐる。かゝる關係に於いて、かれ等は、互に、個人としてではなく、階級員として關係してゐる」(マルクス—エンゲルス論叢『ドイツ觀念論』(Mark-Engels's

Lehre 第二四五頁)

「間接的」個人と眞に生きてゐる個人とは、だが、決して別個の生物、即ち別個の現實ではないのだ！したがつて、私がプロレタリアートの階級意識を、理論的に、論ずるとしたならば、私は、あらゆる科學と等しいやり方をする。即ち、私は特殊な生産過程に對する、即ち個々の資本に對する特別な關係その他から生じたやうな、偶然的な特質を省略してしまひ、あらゆるものに共通なもの特徴的なもの、典型的なもの、所謂「間接的なもの」のみをとるであらう。だが、かくして得られた「意識」は、決して純粹のものでもなく、決して生きてゐる個人の外に實體化されてゐるものでもないといふことは、しばらく、保留して置かう。かくのごとくして得られた意識から、マルクス主義者は、決して歴史の神、即ち「現實するものの、即ち歴史の造物主」をつくらないであらう——し

からずしてマルクス主義者に賛成するものがあるとするれば、すでに明らかなく、かれは、理念こそかゝる役割を演ずると云つた舊ヘーゲル主義者になつてしまふ。勿論、かくして得られた意識は、實在するものである。だが、かゝる意識は、科學によつて、個々の意識から、すべてに共通なる要素を選び分けるといふ風にして得られる。かゝる要素こそ、すべてに共通なるものであり、したがつて、それこそ同一階級構成員に一樣に作用してゐるか、あるひは作用してゐたところの最も本質的な要素である。そして多くのものに、一樣に作用することは、量から質への轉化法則にしたがつて、全く新しいものに、全く異なるものになる。それがため、階級意識は、實在するものであり、實在的な社會的生産物であり、そして實在的な社會力（その意味は、マルクス主義によつて規定された限界に於いてのみ考へられねばならないのだが）である。そして、それ故に、階級意識とは『算術的總和』でもなければ、また『個々の意識の平均』でもない。しかもまた『歸屬問題』でもない。

眞の意識の代りに、『歸屬せられた』意識を假定することが、いかなる結論になるかを、われわれは後に詳細に觀るであらう。だが、こゝでは、先づ第一に、われわれは、多くの讀者（いづれも、マルクス主義的な著述に通じてゐるか、あるひは全く今日の生活に目を閉ぢてゐないもののみであ

るといふことが出来るのだが）が非常に驚くであらうと思はれる結論を擧げようと思ふ。その驚くべき結論はかう叫ぶ。プロレタリアートのみが、階級意識を持つてゐるのだ！ なほ、ブルジョアジエは、どう見ても、階級意識を持つてゐるといふことは確實でないどころか、むしろその反對に、非常に疑はしいのだ！ と。

聞け——

「ロシアの中農並に富農の二三の反革命的一揆と農民戦争とが、窮極の社會觀に於いて觀念的に關連してゐるといふことは、理論として無政府主義と農民の「階級意識」とを、非常によく特徴づけてゐるものである。それで、これ等の階級に在つては……本質上、階級意識を云々し得ない。即ち、自身の状態を完全に意識するといふことは、かくのごとき階級に、自身の進化の必然性に對する努力が無駄なることを知らしめるであらう。それ故に、この場合、意識と利害とは、互に矛盾せる對立關係に在る。そして階級意識は、階級的利害の歸屬問題として決定されるのだから、これはまた、直接に與へられた歴史的現實に於いては、その發展の不可能なることを、哲學的に明らかにする」（圖點はエル・ルーダスによつて附されたもの）（ルカッチ『歴史と階級意識』第七三頁、水谷、米村兩氏譯『階級意識とは何ぞや』第三五—三六頁——譯者）

私は、何人に對しても、ルカツチの文章の迷宮内の迷路に於いては、アリアードナの救の綱がなくは正路を見出すなどと期待することは出来ない。しからざれば、私は、此の引用文に對して、ここで讀者諸君に對して何と妄想がマルクス主義として與へられてゐることが、あたかもいかなる批判もさうすることが出来るがごとくに、といふことはそれ自體によつて明らかであるなどといふ註釋を附さないであらう。

此の場合、一體何が云はれてゐるのかを考へて見よ。農民に在つては、『本質上』階級意識が全く論ぜられ得ない。何故にだ——とかう驚いた讀者が質問する。だが農民は、階級意識を持つてゐる。即ち、思想も持つてゐるし、感情、目的等々も持つてゐる。しかも、そのことは、日常の生活を表してゐるものだ。ルカツチは云ふ『否々、かれ等はそんなものを持つてゐない』と。だが、恐らくは、かれ等が、借用した意識を持つてゐるが故にはなからう。即ちかれ等が、可能であつたとしても、他の階級から（ブルジョアジーからか、あるひはプロレタリアートからか）借りた意識を持つてゐるからではないだらう。かう云ふ場合があつたにしても、しかもなほ、農民は往々にして、借用しなかつた自身の意識を持つてゐる。そしてその意識は生産に於けるかれらの獨特の地位から生じたものであり、正に、かれ等獨特の階級意識と稱せられ得るところのものである。されば、

ブハーリンは、かれの『史的唯物論の理論』に於いて、農民の階級意識を次のごとく書いてゐる——

『かれ等を一切の新しいものから遠ざけるところの私有財産、個人主義、孤立、自身の村落以外に在るもの一切に對する猜疑心にはばられてゐる』（『史的唯物論の理論』ドイツ版、第三四〇頁）
こゝで、ブハーリンは、また、農民が屢々無政府主義の理論を受入れることに注意してゐる。そして、その無政府主義の理論について、かれは鮮やかに、『何物も存在せぬであらう』といふ第一節と、『何人も、前節を詳論する権利がないであらう』といふ第二節との、二つの節からなつてゐると云つてゐる。農民の觀念と無政府主義との眞の關連について、またルカツチがそれをいかに説明したかについて後に二言ばかり論ぜねばならぬだらう。

だが、既に述べられたことからして、農民だつて階級意識を持つてゐること、またブハーリン程のマルクス主義者でさへかういふ意見であることが、極めて明らかである。『違ふ』——と同志ルカツチは云ふ——『かれ等は決して「眞の」階級意識を持つてゐない』。何故にだ？——とかくわれわれは一度質問しよう。かれ等は自身の状態を完全に意識してゐないからだ。何となれば、かれ等にして自身の状態を完全に意識してゐたとすれば、かれ等は、かれ等の猛烈な努力の絶望なることを知らねばならなかつたからと。

然り、理性的な人は、誰でも、他の階級はどうだと云はねばならぬであらう。都市の小ブルジョアジー——それはこれとは別個の状態にあるか？ あるひはまたブルジョアジー——は別個の状態にあるか？ これ等の階級は自身の状態を完全、に意識することが出来るか？ 一寸も意識してゐないのだ！ ルカッチの著書の最もよいところは、實に、かれが、マルクスの觀念論即ち階級意識論が、かれ等は階級意識を持つてゐないし、また持ち得ないと云つてゐると論じてゐるところなのだ！ だがかれ等の利害は、かれ等の状態即ち此の状態の絶望性を知らないことを必要とするのだからこそ、かれ等は種々に誤まつた思想、觀念をつくる——それが、一階級の嚴密なる階級意識と呼ばれるのだ。

今日の社會は、階級に分裂してゐる。各階級はいづれも、生産過程に於いて、獨自の地位を占めてゐる。此の占めた地位に應じて、各階級の生産過程に於いて演ずる役割に應じて、各階級はそれぞれ別個の利害を持つてゐる。そしてその生産條件に適合して、またその利害に對應して、別個の意識を持つ。これこそ實に、階級意識と呼ばれるものだ！

種々なる階級が生産行程に於いて、種々なる地位を持つてゐる、また種々なる利害を持つてゐなかつたとしたならば、それ等は皆同じ意識を、即ち普遍的人間意識を持ち、そして種々なる階級意識を持たぬ。此の場合、かゝる普遍的人間意識は、同時に、客觀的状态の完全なる意識となる。それは今日では可能なことではない。何となれば、敵對的階級は、對立し、その状態及び利害から、世界に關して誤まつて意識せざるを得ないし、誤まつた觀念を持たざるを得ない。

あらゆる今日の諸社會的階級の中に在つて、プロレタリアートのみが、その生産過程に在る地位竝にその利害が、自身に對して、世界(社會)を、在りの儘に認識せしめる状態に在る。したがつて自身の状態を完全に意識する状態に在る。いかにして、またいかなる點に於いて、かゝる可能性が現實的なものになるか否か——それはこゝではなほ關係のない別個の問題である。だが、それが正しくあるひは誤まつて自身の状態を反映してゐるが故に、プロレタリアートの意識は階級意識だと云はれるのではない。むしろその反對に、此の意識があらゆる特徴を以てするも、プロレタリアートにのみ局限されてゐるに過ぎないが故に、プロレタリアートの階級意識と呼ばれるのである。同様にまた他階級も、各々あらゆるその特徴を以つてすれば、それ／＼の階級に局限されるが故にさう云はれるのである。それ故に、プロレタリアートの階級意識は、世界を客觀的に正しく反映してゐるが、普遍的人間意識と呼ばれないで、階級意識とのみ呼ばれるのである。

だから、眞理は、ルカッチが主張したところとは、正に反對なのだ。正に世界が各階級によつて

それ／＼別々に（それで勿論その中に二三のものは誤まつて）解釋せられてゐるからこそ、それで各階級は、それ／＼独自の階級意識を持つてゐるのである。それ故にこそ、階級意識なるものが存するのである。同志ルカッチが主張することは正反對に、階級意識と階級利害とは、密接に關連してゐて、『矛盾せる對立』にはない。だがルカッチによれば、農民は——死せる對象があるひは少なくとも動物位のところである。かれ等は一般に意識を持つてはならなかつたのだ！ しかもかれ等に在つては『意識と利害とが矛盾せる對立』に在るのだ。しかしながらかれ等は、利害を持つてゐる。そしてかれ等は、いかやうにつくられてゐるにしろ、一個の意識を持つてゐる。だが、ルカッチによれば、一方のもの（利害）が他のもの（意識）を排除する（『矛盾は對立』する）。したがつて、かれ等は意識を持たない。かれ等は死んだ物があるひは動物であると。それならば、かれ等は、利害とそれと全く對立する意識とを持つてゐるとも云ふのか？そしてその意識が階級意識と呼ばれ得ないものとすれば、外にどう呼んだらよいのか？

私はそのことが『哲學的には』皆に理解されるかも知れないが、簡単に平凡に——哲學的ではなく——全く理解することが出來ぬものである事を告白する。レーニンが、いかに農民の状態及び階級意識を特徴づけたかを聞かう、そしてそれから直ちにマルクス主義的『唯物論者と哲學的』觀念

論者との差異がどこに在るかを見よう。

『農民の状態は、かれの生存、かれの生産條件、かれの生活條件、かれの經濟條件に適合して農民が——半勞働従事者であり、半投機業者であるといふやうにつくられてゐる』

『農民は——一個の特殊階級である。勞働従事者としては、かれ等は資本主義的搾取の敵ではあるが、しかし同時に、かれ等自身私有財産者である。農民は數百年來、パンはかれに所屬するものであり、それを賣る權利があるといふ信仰を植ゑつけられて來た。さうすることは私の權利だ、何となれば、それは私の勞働であり、私の汗であり血であるが故に——とかう農民は考へる。かれの心理を速やかに克服することは不可能である。これを克服するには長い、困難なる闘争過程が必要である。』

『問題は、農民がパンの自由交易に習慣づけられてゐるといふことに在る』

『農民は、半勞働従事者であり、半投機業者である。農民は、かれの汗と血とを以つて、かれのパンを獲得するが故に、かれは地主、資本家、商人によつて搾取されるが故に、勞働従事者である。農民は——パンを即ちかゝる交換對象物を、賣るが故に投機業者である……』（ロシア版レーニン全集、第十六卷、『自由及び平等なる標語を以つてする民衆爲闘に關して』第二一〇頁）

第一のものでは、こゝで、農民階級が一の『特殊階級』として認めてゐる。だが、ルカッチによれば、ついでだから云つて置くに過ぎないのだが『かれ等が、嚴密なるマルクス主義的意味に於いて、一般に階級と呼ばれ得るかどうか、怪しいものである（ルカッチ、『歴史と階級意識』第七三頁）、私は、たゞそのことを、

第二に於いて、こゝで特殊な階級心理（かれの心理は、速急に克服することは不可能であるが）として、即ち農民の階級意識として、何が書かれてゐるのか？

かれ等は特殊の心理、特殊な階級意識を持つてゐる特殊階級であるのだから、それは、一部分は、プロレタリアートに好都合であるが、しかし一部分は、プロレタリアートに危険である——したがつて、ソヴェエツト共和國に於いては、農民とプロレタリアとは平等でない。

具體的問題を具體的に分析し、哲學的な用語に満足しない唯物論者——マルクス主義者はかう論ずる。マルクス主義者——唯物論者は、階級の意識を、『歸屬問題』と解さないで、よく考慮して、政策が建てられねばならないところの、一の往々にして危険性のある社會的に實在する力即ち現實と解する。階級意識から、『歸屬せられた』幽霊がつくられるならば、プロレタリアートの政策もまた幽霊に向けられて、幽霊的になつてしまふであらう——そのことはプロレタリア革命に有利ではないのだ！

のだ！

しからば、何故に、農民は往々にして、無政府主義の理論を受け入れたか？ ルカッチの云ふやうに、階級意識を持つてゐないからではなくて、實にその反對に、かれ等が一の階級意識を持つてゐるからなのである。農民は——われわれがレーニンの言葉の中から見たやうに——小ブルジョア階級（半労働従事者、半投機業者）である。そして無政府主義——は小ブルジョア理論である。農民の斷片的な小經營方法が、即ち個人主義が、個人主義的であるところの、理想とするところが小經營であるところの理論に、直接に共鳴する。しかも以上のことは明らかだ！ したがつてまた、農民がある時には資本家に、ある時にはプロレタリアートに味方するといふことも明らかである。何となれば、かれ等は、半労働従事者であり、半投機業者だからだ！ だが、かれ等が、特殊の階級意識を持つてゐる特殊階級でないからではないのだ、

ルカッチの混同してゐることを、明白に知らないとしたならば、マルクス主義者だと自稱してゐる著述家に在つては、以上のことすべてが、殆んど理解されてゐないのだ。ルカッチは、實際にあるがまゝの階級意識と、階級意識がない場合、あるらしく思はれるやうな階級意識と混同してゐる。かれは、階級内に實際に在る階級的利害と、階級利害がない場合、あるらしく思はれるやうな階級

的利害とを混同してゐる。だが次のことは明らかである。

五〇

非プロレタリア諸階級が『階級意識』を持つてゐるとせば、したがつて同志ルカッチが規定したやうにかれ等が自身の状態を完全に意識してゐるとせば、かれ等は、客観的にあるがまゝに、社會を認識するであらう。即ち、かれ等は皆、階級意識——社會を、客観的にあるがまゝに認識するところの唯一の階級即ちプロレタリアートの——を持つてであらう。だが、しからば、同時にあらゆる階級が同じ意識を持つたことになる。したがつて、階級意識は一般に存在してゐないことになる。全人間は同じ意識を持つことになる。

二、一の階級の階級意識には程度がある。何となれば、階級といふものは、統一的ではないから。ある階級意識の程度、明確さ及び不確かさといふことが、一の問題であり、ある階級の典型的な階級意識といふことが、他の問題である。同志ルカッチが、階級の客観的状态と完全に一致せる意識のみを階級意識だといふならば——かれは、この段階に達せざる階級の思惟を、どう呼ぶのか？ さうだとすれば、理論的な階級意識のみは存在してゐるが、現実的な階級意識はない。プロレタリアートに於いてさへないのである。何となればプロレタリアートの場合にさへ、前衛即ち××黨しか『意識』してゐないからである。だが多かれ少なかれ、とも角も、明らかに、プロレタリアートの

の前衛外の階級員は、プロレタリアートの状態に對應せる意識を持つてゐる。しかも××黨員は——既に『共產黨宣言』によれば——プロレタリアート内の特殊階級ではない。それで、プロレタリアートが、完全に、あるひは少しばかりしか『階級意識的』に、あるひはまた階級對立的にさへ、考へさせられてゐないものとすれば、かれ等の經濟過程に於ける状態自體が、純粹に典型的でないからなのである。かれ等は、大工場で働いてゐないか、あるひはかれ等が『小ブルジョアのプロレタリアート』に屬してゐるからか、どちらかなのである。でなければ、同志ルカッチが、かゝるエングルス表現を知つてゐないのか？ だが、此の言ひ現はしは、階級といふものが、決して硬化せる彫像ではなくて、流動しつゝある過程であることを論じてゐるのだ。その階級意識も同様である。だから、現實の生きてゐる人間の頭の中に、非常に、いろいろな階級の觀念が入ることが出来るのである——即ちいろいろな階級は互に影響し合ふのである。『推移は流動である』——これはいつの場合でも同じである。

三、しからば、利害と意識とは、——かゝる利害が階級的利害でないとするれば、——互に『矛盾對立』するより仕方がない。農民が特殊階級——半労働従事者、半投機業者——でないならば、かれ等は、かれ等の利害が——××主義的であることを知るであらう。しかるに、かれ等の階級意識、

かれ等の階級的利害こそ、かれ等が、さう了解するのを妨げるのだ！ もし、彼等にして、更に、かれ等が此の事を了解することになれば（そしてプロレタリアートの××といふ處置が、××黨の宣傳と相俟つて、かれ等をそこまでつれて来るならば）、かれ等は、自身に獨特な階級意識を棄てて、プロレタリアートの意識をその代りに受け入れるに至る。さういふことが、辯證法なのだ！ だが、かれ等が、特殊的階級である限り、かれ等は、特殊な階級意識と、特殊な利害とを持つてゐるのだ！ そして此の二つのものが、かけ離れた「矛盾せる對立に」在ることは、階級内に在つては、絶対になく、完全に調和してゐる。

以上三點が考察せられる場合にのみ、同志ルカッチが、階級意識をかれの「歸屬問題」に結びつけようとしたことの馬鹿らしさが、明らかにせられる。此の場合、同志ルカッチは、ロシアのボグタノフがマツハに好意を寄せたと同じやうに、かれの師匠たるリツカート及びマクス・ウエーバーに好意を寄せてゐる。そのことをブレハノフは次のごとく書いてゐる——

『君（勿論ボグタノフ——エル・ルーガス）は、君が君の教師とは無關係であると思つてゐるところでさへ、君は、かれから學んだ學説を粉飾してゐるに過ぎぬ。そしてその際、君は、かれの學説を、君が完全に、忠實にかれの精神に止まつてゐて、粉飾してゐるのだ——君は、君の教

師に在つては潜在的に馬鹿けたもの（馬鹿けたものそれ自體とヘーゲルが云つてたのだが）に過ぎなかつたものを、明らかに馬鹿氣たものにしたに過ぎない』（ブレハノフ『ボグタノフに對する第三回公開狀』ロシア版第八六頁）

*

*

*

*

かくのごとき「歸屬」によつて、幽霊のやうな階級意識に到達せしめられたことは、多くは、理論の働きである。理論は、階級自體が意識されるズツト前に、社會進化の根本的傾向を、豫見することが出来る。そして、人間の意識は、かゝる進化に従屬してゐるものだから、意識が物質的生産力に因果的に従屬してゐる、即ち眞の生産關係に因果的に従屬してゐること等々を豫言するところの唯物的理論は、意識特にプロレタリアートの階級意識の發展傾向をも、豫見することが出来る。そしていかにして豫想すべきか、ルカッチによつて引張り出されたマルクスの引用文は、此のことを論じてゐるに過ぎないのだ。そして、そのことは、ルカッチがこれから結論したのは、全然異つてゐる。

當該の文章は、『神聖家族』中に、パウエルに對する駁論となつて現はれてゐる。全文を省略せず

に引用せしめよ。何となれば『哲學的妄想の最も確な曝露は實踐である』から。

『社會主義的著作家が、プロレタリアートに對して、かくのごとき世界的役割を負はしたとすれば、これを、批判的批判だと信じてゐるやうな仕方をしない。何となれば批判的批判は、プロレタリアを神様だと思つてゐるのだから。むしろ反對である。』

あらゆる人間性からの除外、發達したプロレタリアートに於いては人間性の外見からさへも除外が、實際に行はれてゐるのだから、プロレタリアートの生活條件に於いては、今日の社會のあらゆる生活條件が、その極度に非人間視されてゐるのだから、人間はプロレタリアートとしては、自身を失ふが、しかし同時に此の損失の理論的に意識することに成功するのみならず、直接に、最早避けることの出来ない、美化することの出来ない、絶對絶命の貧困——必然的實踐的表現——によつて、かゝる非人間性に對する反逆を餘儀なくされるのだから、そのために、プロレタリアートは、自身を解放し得るし、またしなければならぬ。だが、プロレタリアートはかれ特有の生活條件を揚棄することなくしては、自身を解放し得ない。それ自身の生活條件を、プロレタリアートの地位に集中せる今日の社會の一切の非人間的な生活條件を揚棄することなくしては、揚棄し得ない。プロレタリアートは、難しい、しかしながらも訓練する勞働の

學校を経たことは無駄ではない。

それ故に個々のプロレタリアあるひは全プロレタリア階級さへも、一時、考へてゐるものが問題なのでない。プロレタリアートが實在し、そして此の實在に應じて歴史的になさざるを得ざるところのものが問題なのである。その目的及びその歴史的行動は、ブルジョア社會の今日の組織に於いて明らかであるがごとく、かれ自身の生活状態に在つては、なさざるを得ないものとして豫示されてゐる。この時に、イギリスだのフランスだののプロレタリアートの大部分は、既に自身の歴史的任務を意識して、此の意識を完全に明瞭にするために、熱心に活動してゐるといふことは、引張り出すまでもないことだ。』

以上の引用文——それを理解するためには殆んど全く何等の註釋を要しないのだが——から、現實的(階級的)意識の否定だとか、また假定的な『歸屬的な』意識によるその代置だとかは、あたかも他のマルクスの引用文から自然に於ける辯證法の否定及びそれを社會に局限することが生れないと等しく、生じて來ない。前者に於いても、後者に於いても、同様に、たゞ、どうして引用文がそんなことを読み出さうとしてゐるのかが、分らないのだ。

だが、マルクスが意味するところは、明らかである。社會主義的著作家が、プロレタリアートに

對してある世界史的役割を叫ぶ。何故にかれ等はさういふことをするか、またかれ等は何故にさうすることが出来るか？今日の社會が、社會の將來の行手を、必然に、投擲せられた石の行手を必然に落下の法則によつて豫告すると同様に、豫告するところの一定の合法性に從屬せしめられてゐるからである。石は、その落下が自然力によつて必然に豫告されるといふことについては、何も知らない。同様に、プロレタリアートは、その役割について、一時、何等の考をも持つてゐないといふことがあるかも知れない。だが、一時的にのみである——かうマルクスは云つてゐる。何となれば、プロレタリアは石ではなく、意識を持つてゐる人間なのだから。かれらは、自身の歴史的役割さへも意識するが故にである。イギリス人やフランス人は、既に、自身の歴史的任務を意識せしめられ始めてゐる。そして他國人は既にこれを追はうとしてゐる。

私はさういふことを、どこから知るか？マルクスは云ふ——私は唯物論者として、意識が社會的實在に依存してゐること、即ち意識がこの社會的實在の所産であることを知つてゐるが故である。この實在は、プロレタリアートが貧困その他によつて、絶対に、必然的に、此の闘争に訴へざるを得ないといふやうにされてゐるのだから、それで、時と共に、意識も亦プロレタリアートの中に目醒めるといふことも絶對的であり、必然的であると。

此の引用文の中には、それ以上のものはないのだ！そして——と私は繰返さなくてはならない——それ以上を此の引用文から讀み出すところのものは、誤まらざるを得ない！

それにもかゝらず、引用文に在るところで、實に十分なのだ！しかも意識の役割は、正確に明確に、誤まらずに、規定されてゐる。マルクスは——ルカッチが、われわれに信ぜしめんとしたやうに——プロレタリアートが目的と考へあるひは考へるであらうところのものが、唯一のものだなどと云はなかつた。そんなことを云ふものは、宿命論であつて、マルクスは決して宿命論者ではない。かれはたゞ、かう云つた丈のことだ。即ち、プロレタリアートが、一時、目的と考へるところのものが問題なのではないと。そしてわれわれが知つてゐる通り、いかなる方面の歴史に於いても時間が（ルカッチの言葉を借りて云へば）非常に重大な範疇である。プロレタリアートは、一時、かれの解放行爲をするためには、未だ成熟してゐなかつた。爛熟して來るといふことはいろいろな状態に依存してゐて、その下に、プロレタリアートの意識もまた一定の恐らくは大なる役割を演ずる。だが、そのことは、プロレタリアートが成熟するであらうといふこと、プロレタリアートが自身の使命を果す時が、即ちプロレタリアートが此の使命を意識せしめられるだらう時が、來ねばならないことを豫見する妨げとはならない。がしかし、今日の社會の構成から、プロレタリアートの

將來の任務を見出すことが、一時、問題ではない丈のことである。後に、かゝる理論的認識——先づはじめは少數の人々の頭の中にしかないところの——が、プロレタリアートの全體の、あるいは大部分の頭を満たすであらう。こゝにいかなる『歸屬問題』がかくされてゐるといふのか？

そんなことはない。即ち、プロレタリアートの意識は、環境によつて、因果的に説明される。ここに於いて、かゝる意識こそ實に個々のプロレタリアートの心理的意識、あるひはその『總體の（群集心理的）意識』である。そして同志ルカッチが主張したのとは正に正反對に、『全體としての階級の歴史的に重大な行爲』こそ、『窮極に於いてかゝる（歸屬せられた）意識によつて』……決定せられ、そして此の意識からのみ認識され得るもの』ではない『歴史的に重大な行爲のみならず、階級の各行爲を窮極に於いて』決定するところのものは、このマルクスによつて述べられた階級の客觀的實在である。此の實在は、階級に、その目的を豫告する。即ち實在の中に、それに相應する意識を發見する。しかして後、この眞の『歸屬された』ものでない意識が、階級の行爲を決定する。もちろん、將來に於いては、此の意識は『窮極的な』ものではない。意識は、人間に於けるあらゆる客觀的必然性の必然的通過點である。あらゆる物質は、觀念に改變せられねばならない。と云つても、やはり『窮極』に於いて——物質が決定する。

『批判的批判は、以上のことを認めること出来なければ出来な程それ自身を歴史の創造的要素なりと揚言する。歴史的矛盾が、即ちかれ等を揚棄すべき活動が、かれ等に附隨してゐる』かうマルクスは、引用文の直後に書いてゐる。正にかれはかれルカッチを豫想して、豫防してゐるではないか？

今日『批判的批判』が——同志ゲオルグ・ルカッチの哲學の中に、その復活を祝してゐるではないか？

昭和三年一月廿一日印刷
昭和三年一月廿七日發行

(定價參拾錢)

論議意級階のスケルマ

譯者 稻村順三

發行者 足助素一

發行所 叢文閣

振替東京四二八八九番
電話牛込二五七三番

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷所 成章堂印刷所
小林龍介

終

定價 .30